



創刊百四十年型

# 信仰の喜びを直接届けよう

# 真 朋

発行所

天理教芦津大教会

〒546-0003

大阪市東住吉区

今川8丁目6番32号

電話 06 (6702) 1980

FAX 06 (6700) 1854

Eメール shinmei@ashitsu.or.jp

印刷所 天理時報社



お道のにをいを届けようと、1軒ずつ心を込めて戸別訪問に歩く

残らずく遠い所、悠つくりして居ては遅れる。この人にをいを掛けんならんとせば、道の辻で会うても掛けてくれ。これからこれが仕事や。

明治40年4月7日 おさしづ

良い匂いには人が自然に寄り集うように、私たちがひながたを見つめ、教祖にお喜びいただこうとの心で通る姿は、周囲に良い香りとなって映り、人を惹き付けます。それと同時にこの匂いは、ただ人が寄り集うのを待つだけでなく、自ら積極的に周囲にをいを伝えようと働き掛けることが大切です。

大教会では、「一人のようばくが3枚のリーフレットを持って、身近な方にお道のにをいを届けよう」と、各教会を通して、全ようばくに3枚ずつリーフレットを配布しました。リーフレットを手にしても、「神様の話をどう取り次げばいいのか分からない」「身近な人には、かえって声を掛けにくい」といった不安や躊躇もあるでしょう。

しかし、電子機器や通信環境が発達しても、まだ「匂い」は伝えることができません。匂いを届けるには、相手に直接働き掛けること。リーフレットを手渡しし、そこに自身の信仰の喜びを一言添えることで、あなたの「にをい」が伝わります。教祖のひながたは、たすけ一条のひながた。一言のにをいがけは、その人の運命をも変えます。人だすけの匂、お道のにをいを身に付けて身近な方に働き掛けましょう。

## 正面四方

毎年台風が発生すると、どのコースを通るのかと心配になる。特に左側を通る予想進路図が出たときは、

気が気でない。雨風がひどく瓦が飛んだり、雨漏りがしたり、いろいろな物が飛んできたりと、必ず何らかの災害が起こる。

我々も同じだなと思うことがある。雷のように大きな声で怒ったり、激しい雨風のようには暴言を吐いたり、物が飛んでいくように力で納得させようとしてはいないだろうか。後に残るのは、恨みであり腹立ちであり、やつてしまったことを振り返って落ち込んだりする。

そうならないよう、日頃から親神様の御守護に感謝して、陽気に明るく過ごしたい。かーっとならないように心を治め、物事を大きく捉えられるようになりたいと思う。

《8月次祭 挨拶》

## 信仰の喜びを伝え

## 教会やおちばへ導く実践を

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日々は年祭活動の上にご丹精いただきまして、誠にご苦勞様です。また残暑厳しき中を大教会へ足をお運びくださって、ただ今、共に月次祭を勇んで勤めることができましたことは、大変ありがたい次第です。

4年ぶりに「こどもおちばがえり」が再開いたしました。詰所ではお化け屋敷やゲームコーナーなどの催し物を行いました。私も何度か見に行きましたが、帰ってきた子供たちが笑顔で過ごしてくれている姿を見て、非常に嬉しくなりました。親里で楽しい思い出をつくってくれたことだと思いますし、また引率してくださった育成会員の皆様方も、おちばのお徳を頂かれたと非常にありがたいと思います。

論達に、「親から子、子から孫へと引き継いでいく一步一步の積み重ね」とありますが、こうしたおちばでの育成活動に、声を掛け、そして誘って連れて行くことは、一步一步の積み重ねになっていくのではないかなと思います。

引き続き行われた「学生生徒修養会・高校の部」にも、芦津から14名が参加してくれましたが、おちばで仲間たちと信仰の喜びを何か感じ取って、これから信仰者として芽生えていく種を、心に頂いたんじゃないかなと思います。子弟を育成し

ていくのは、先に信仰している私たちの役目でありますから、その上にも、こうしたおちばでの親心溢れる育成活動を、これから大いに活用していただきたいと思います。

◇ ◇ ◇

あるとき、一人の人が入信をし、人だすけのできるようばくに成人するまでに、どのような軌跡を辿るのかを考えてみたことがあります。

まずは入信する元一日があります。身上や事情をきつかけに、御守護いただいて道に入る。中には教えに感銘して入信した人や、教会長やようぼくの人柄に惚れ込んで信仰を始めた人もあります。そして誘われるままに教会へ参拝し、おちばへ導かれ、初席を運んで席を重ねて、おさづけの理を拝戴する。また親神様からいろいろなことを見せていただき、時には厳しい節を頂戴していんねんを自覚し、御恩報じを心に治めて、人をたすける心へと、心の入れ替えに努める。

こうした成人の歩みは、この方を導く教会長、ようぼくの丹精にかかっているのです。この丹精を受けて、人をたすける心を持って行動ができるようになり、人のために祈り、病む人におさづけを取り次ぐようになる。そのおたすけを通して、人をたすける喜びを味わい、その喜びが次のおたすけに繋が（つな）がり、人をたすけて我が身たすかる御守護を体得し、喜びは一層深まって、さらにおたすけに励むようになる。これが理想的な成人の姿だと思ったのです。

一人の人が、人だすけのできるようばくに成人する過程には、その人を導いた教会長やようぼくが密接に関わっています。中でもお道の教えに最初に触れる場面、いわゆる入信の元一日は、

非常に大切なことです。門をくぐらねば中に入れないように、その人がお道の素晴らしさに出会う機会がなければ、ようぼくへの成人は一切ないわけです。つまり、まだ信仰を知らない人々に、にをいを掛けておたすけをすることが、私たち教会長、ようぼくの大切な役目であり仕事です。

9 月はにをいがけ強調の月です。大教会としては、9 月から 12 月にかけて、教会長夫妻、後継者夫妻を対象に「布教キャラバン隊」を実施して、勇んだ動きを起こそうと計画しています。それとともに、ようぼくの方には、一人が 3 人の人々にをいを掛けようと呼び掛けて、教会を通じて一人に 3 枚のリーフレットをお配りしています。これを活用して、3 人の方に声を掛けていただきたい。その際に心においていただきたいの、リーフレットを手渡すだけで済ませずに、信仰の喜びやたすけていただきたことを伝える。教会へお誘いをし、おちばへ導かせていただく。こうした行動をぜひ心掛けていただきたいと思います。

見ず知らずの人へのにをいがけはハードルが高いと感じる方は、「家庭や職場など身近なところから、にをいがけを心掛けよう」と諭達で示されるように、まずは身近なところから声を掛けていただきたいと思います。周囲を見渡せば、身近な人々の中に信仰していない方はかなりおられるでしょうし、その人の向こう側には大勢の未信仰の人々がおられます。まずは身近な人に教祖のにをいをお届けするために、リーフレットを活用していただきたいと思います。

どうか心勇んで、時旬の歩みを進めてくださいますことをお願いいたします。今月の挨拶にさせていただきます。(要約)

### 立教百八十六年 八月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には神人和楽の世を楽しみに人間世界をお創め下され、長の年月変わらぬ御守護と温かい心を以てお育て下さいまして、真にたすかる道へとお導き下さいます御厚恩の程は、誠に有難く勿体無い限りでございます。又、四年ぶりのこともおちばがえりに帰参した子供達は、魂におちばの御徳を頂戴して、親里での楽しい思い出をつくらせて頂くことが出来ました。更には、学生生徒修養会に参加した学生たちは、仲間と過ごす親里で信仰の喜びと嬉しさを味わわせて頂きました。夏のおちばで子弟育成の上に賜りました親心と御守護に、事分けて厚く御礼を申し上げる次第でございます。私共は親神様の果てしなきお慈しみに日々拝謝し、御恩報じに努めさせて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおちばより当大教会にお許しを頂きました、月に一度の大切な日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、八月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、残暑厳しき中を今日の日を楽しみに参らせて頂きました芦津の道の子達が、日頃賜る御恩に御礼申し上げ、人々のたすかりと世の治まりを一心に願う誠の心をお受け取り下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願ひ申し上げます。私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼく一同は、信仰の喜びとようぼくとして働かせて頂く誇りを胸に湛えて、周囲の人々に道のにをいをかけ、機を逃さぬおたすけに努め励ませて頂きまして、これから秋にかけて年祭活動の旬に相応しい実動に一段と勇ませて頂く所存でございます。何卒、至らぬ所は幾重にもお仕込み下さいまして、深き御慈愛を以て成人の道をお導き下され、陽気ぐらしへ向かうたすけ一条の道の一層の進展を御守護下さいますよう、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。



《8月月次祭神殿講話》

# 神一条の信仰を目標に 足元を見つめて通ろう

役員 守田清一

## 道が伸び榮えゆく元

「論達第四号」が發布されてから、私たちは、この論達を指針として、ただ今、年祭活動を歩んでいます。

そうした中で、この道の初代の頃、いわゆる道の創世期の時代を少し顧みると、『稿本天理教教祖伝逸話篇』をはじめ、先人先輩方の書籍の中に、不思議珍しい御守護の数々を見ることが出来ます。

こうした不思議な御守護の数々が、この道が伸び榮えゆく元になっているということを思うとき、人智を超えた親神様のお働きがあるからこそ、この道が成立しているというのを改めて考えさせられます。

もちろん、論達に、

あるときは、

「水を飲めば水の味がする」

と、どんな中でも親神様の大きな御守護に感謝して通ることを教えられ、……

とお示しくだされているように、日々、体内に十全の御守護をもってお働きくだされている親神様のお働きに感謝することが基本です。日々当たり前のように思っているこの十全のお働きこそ、人智を超えるものであるのですが、ただ、次に、

「ふしから芽が出る」

というお言葉が続くように、何か節を頂いて、今まで当たり前であったことがそうでなくなり、そのバランスを崩したときのことについて、原典においていろいろな

場面で、「心次第で自由のお働きをする」とお示しくだされています。そうした不思議な御守護をもつて広まっていったのがこの道であり、道の初代の頃の信仰だと思ふのです。

こうしたことを思うとき、私自身、今一度、10年前の教祖百三十年祭の年祭活動を振り返ってみたいと思います。何故なら、当時自教会において、いくつかの不思議をお見せいただくと同時に、良きにしろ悪しきにしろ、大きく動いた3年であったように思うからです。

## 奇跡的な御守護

これは、私の教会に繋がる一婦人の話です。

あるときその方が、身体に変調を感じて、近くの病院に行ったところ、「一刻を争うので、すぐに大きな病院へ行くように」と言われ、即入院。検査の結果は、胃ガンと悪性リンパ腫の併発で、余命3カ月との宣告を受けました。

胃は、進行の早いスキルス性の

胃ガンで、すでにステージ4の末期状態。悪性リンパ腫も併発しているため、今の医学では、どうすることもできない状態にありました。

ところが、治療に専念している中、胃ガンの検査をしたときに、不思議なことに、スキルス性の胃ガンはステージ4からステージ1の初期状態になっていたそうです。続いて、数回の検査をした結果、悪性リンパ腫も完全に消失し、胃ガンの初期状態の手術だけで済みました。主治医をはじめ、手術担当の医師は、「こんなことは初めてだ、ありえない」と大変驚かれたそうです。

あれから10年経った今も、ガンの再発をみることもなく元気で、毎月欠かさずことなく、月次祭に参加してくれております。

どうしてたすかったのかと聞かれても、私には分かりません。歴代の徳、本人の日々の徳積みと共に、人智を超えた親神様のお働きを頂けるだけの、何か物種があったのでしょうか。



そして、この奇跡的な光景を目の当たりにしたご主人と子供2人がすぐに別席を運び、3人揃っておさづけの理を戴かれました。この家にとつての転機となった大きな出来事です。

### いんねん果たしの道

今一つ、これも前の年祭活動の時のことです。

教祖御誕生祭から婦人会総会にかけて、本部のひのきしんがあり、部内の後継者の奥さん2人に声をかけると、2人とも快く「行かせてもらいます」と返事をしてくれました。

しかし、しばらくすると、ひのきしんに出るはずだった1人から「実は子供ができたので、ひのきしんができなくなりました」との連絡がありました。

そしてそれから1カ月も経たないうちに、今度はもう1人の方からも「実は子供ができました」との連絡がありました。

実はこの2人は、結婚後、なかなか子供ができなかったところに、ほぼ同時に子供をお与えいただいたのです。

「声をかけたときに、快く返事をくれた2人に、親神様が働いてくださったのだな」と感じずにはいられない出来事でした。

その年の11月、先に妊娠した子が無事に女の子を出産し、来月はもう1人の子の出産だと心待ちにしていました。

そして、翌月12月3日、部内の会長さんより一本の電話が入りました。12月11日に出産予定だったので、つきり子供が生まれたのかなと思つたら、「今回は残念な結果になってしまいました」とのこ

とでした。

話を聞くと、お腹の中で子供の動きが悪くなって、急いで病院に行くと、すでに亡くなっているとのことでありました。私は聞いた瞬間、返す言葉も見つかりませんでした。

「十月十日は胎内で育つ」と聞きますが、10カ月胎内に置いていただき、最後の10日がもたなかったのです。大きな節でした。

起こった現実に対し、私の心の中では、節というよりも、「そこまですぐいことをしなくても」との思いが先立ち、喜べない現実があったのも事実です。

ただ教会としてのいんねんを辿ったときに、この2人なら乗り越えられるとの思いで「いんねん果たしの道を通ってくれているのかな」としか考えられませんでした。

実は、その教会の初代会長の奥さんは、子宮外妊娠を経験しており、当時の医療ではどうしようもなく、結局子供に恵まれず、今の会長さんが養子に入ってくれているのです。

そして、もう一つ気になったのは、この方の主人が若い頃、友達

何人かと旅行中、たまたま彼が運転しているときにタイヤが破裂して、一人が亡くなるという大事故を起こしてしまったのです。走行中にタイヤがパンクするという、誰もが起こす可能性のある事故ですが、彼はそれに長年苦しみ、「自分は幸せになつてはいけない人間だ」と思い込んで、独身で生活をしていました。

そのことを聞いて私は、「そんなに1人で苦しむ必要はない」と思い、紹介したのが今の奥さんです。その2人の間にできた子供でした。男の子だったそうです。

### 黒疱疹のおたすけ

私たちは、この道を通つていても、見えたことばかりにとらわれがちですが、信仰の本質は、見えただけだけでは判断しがたいことも多くあると思うのです。

『稿本天理教祖伝』を読んでいても、親神様は、優しく私たちを包んでくださる親であると同時に、

理には厳しい一面をもっておられるように思います。

これは、中山みき様が月日のやしろとなられる10年ほど前、預り子が黒疱瘡にかかった時のお話です。

……三十一歳の頃、近所の家で、子供を五人も亡くした上、六人目の男の児も、乳不足で育てかねているのを見るに忍びず、親切にも引き取って世話しておられた処、計らずもこの預り子が疱瘡に罹り、一心こめての看病にも拘らず、十一日目には黒疱瘡となった。医者は、とても救からん。と、匙を投げたが、教祖は、

「我が世話中に死なせては、何とも申訳ない。」

と、思われ、氏神に百日の跣足詣りをし、天に向って、八百万の神々に、

「無理な願では御座いますが、預り子の疱瘡難しい処、お救け下さいませ。その代りに、男子一人を残し、娘二人の命を身代りにさし出し申します。

それでも不足で御座いますれば、願満ちたその上は私の命をも差上げ申します。」

と、一心こめて祈願された。預り子は日一日と快方に向い、やがて全快した。その後天保元年、次女おやすは四歳で迎取りとなり、翌二年九月二十一日夜、三女おはる、同四年十一月七日、四女おつねと相次いで生れたが、同六年おつねは三歳で迎取りとなった。同八年十二月十五日には、五女こかんが生れた。

後日のお話によると、願通り二人の生命を同時に受け取っては気の毒ゆえ、一人迎え取って更にその魂を生れ出させ、又迎え取って二人分に受け取った、との事であった。

『稿本天理教教祖伝』20～22頁  
ここを拝読するとき、親神様の厳しさを見るのです。

みき様は人だすけのためにされていることなので、命をお供えしても、親神様はそこまでの厳しさを実際には求められはしない、と私ならそう考えてしまうのです。

しかしながらこのとき、親神様はきちんと、子供を引き取るという約束事を実行されているのです。

当時の方々にとっては、魂の生まれ替わりなどは知る由もなく、姿としては単なる出直しであつたと思うのです。

年祭活動中に私たちに見せて頂いた大きな節ですが、これは今でこそ理解できることですが、大節を生き節に変えて、教会と夫婦各のマイナス点を白紙に戻してくださる姿を見ると、やはり、信仰をしているということ、大きな強みであると同時に、節を頂いたこの夫婦が、ひるむことなく次に向かつて歩み出してくれたことに敬意を表すのです。親神様は、各々が持ち合わせるいんねんをきちんと清算してくださったのでしよう。

そうした中、次の子供が授かるようにとの思いでいっぱいでしたが、その後も流産という再度の節を乗り越えて、3年後の暮れに妊娠し、翌年の9月20日に、無事男の子を出産しました。

目に見えないものを信じて通る

私は「信仰とは非常に難しいな」と考えることもあります。それは、目に見えないものを信じて通るということだからです。

目に見えるものは、たやすく信じることができますが、私たちお互いは、目に見えないものを信じる世界に身を置いて、この道の教えを信じて通る中に、徳、与えの世界があるということを見せていただかなければならないからです。そう考えると、私たちは、目に見えた理想の形や正論だけが正しいように思いがちですが、そこに心がなければ、この道を通る上において心もとないことがあるように思うのです。

人生にはさまざまなことが起きます。何故と聞かれても、分からないことがほとんどです。

ただ、「諭達第四号」で、

……あるときは、

「ふしから芽が出る」と、成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様

[illegible]



## 夏休みあしつ親子参拝

育成部（山田道弘部長）は、8月23日、「夏休みあしつ親子参拝」を実施し、教会子弟をはじめ約70名の少年会員が、家族と共に大教会月次祭に参拝した。

「教会長子弟育成プロジェクト」の一環として立教180年より始まったこの親子参拝は、夏休みを利用し、家族揃って大教会の月次祭に参拝しようという提唱から始まり、毎年恒例の行事となっている。

祭典終了後には、参拝場で子供用のお下がり、食堂前では女子青



子供たちにはお下がりのお菓子が配られた

年の協力を得て、かき氷が配られ、子供たちの笑顔が溢れた。

また夕づとめ後の直会にも子供連れの家族が大勢参加し、大教会長を囲んで、いつも以上に賑やかな直会となった。

## 学生生徒修養会・高校の部

8月11日から14日まで、親里で「学生生徒修養会・高校の部」が開催され、全国から70名が参加した。台風7号の影響により、予定より1日早く解散となったが、3泊4日の日程で、学生たちは「陽気ぐらしに必要なこと」と向き合うことの大切さのテーマのもと、グループワークや講話を通して、新たなお道の仲間と出会い、共に信仰を育んだ。

芦津からは14名が参加。「知らない人ばかりで最初は緊張したけど、すぐにみんなと打ち解けられた」「班のみんなと協力する『ゲームラリー』が一番楽しかった。来年も参加したい」と前向きな感想が聞かれた。

参加者は以下の通り。



八木理栄子・毛利祐太・井上陽・八木雄輝（東大屋、今村育穂（大正町）、吉田百花（今津原）、加世田汰（大島）、山下朝陽・山下保（芦山都）、棚原夢愛・棚原天夢（沖縄）、白谷龍真・田中穂羽（四ツ山）、徳野直礼（紀周）。

## 学生会キャンプ

学生生徒修養会・高校の部に引き続き、芦津学生会（木村里香委員長）は、8月16日から17日にかけて、紀周分教会（和歌山県すさ

み町）を拠点に学生会キャンプを行った。

参加した学生たちは、海や川でのびのびと楽しい時間を過ごした。17日は教会の朝づとめに参拝した後、台風の影響で打ち上げられた砂浜のごみを、地元のボランティア団体と協力しながら回収。海水浴場と周辺の駐車場の清掃ひのきしんに汗を流した。

初めて学生会活動に参加した生徒ともすぐに親しくなり、会活動にとって貴重な仲間づくりの時間ともなった。

参加者は15名であった。



地元のボランティアと共に砂浜のごみ拾い



## ファミリーの集い

島原分教会

島原分教会（長崎県南島原市）では、8月20日、「ファミリーのつどい」を開催した。

これは、年祭活動1年目にあつて、家族みんなで参加し勇ませ合おうと、青年会、女子青年が主体となつて企画、準備、運営にあたつたもので、当日は老若男女41名の参加があつた。

午前10時、岩切正教会長の手に合わせて、親神様・教祖・祖霊様を礼拝した後、役割



を決めて座りづとめ、その後よろづよ八首を総立ちで勤めた。続いて、岩切会長による講話。少年会員にも分かるよう、易しい言葉で年祭活動の門目を論じた。

記念写真撮影の後、青年会、女子青年、少年会はゲームを楽しんだ。その間、婦人会は料理に腕をふるい、お昼から全員で会食。手作りのたこ焼き、かき氷、流しそうめんとバーベキューで、和やかなひと時を過ごした。

## 事情はこび

立教186年8月26日お許し

任命

明道分教会

七代会長

松森 誠太 35歳



キャットミュージックカレ

ツジ専門学校卒業。

平成18年おさづけの理拝戴。

平成20年修養科第80期修了、

教人登録。大教会、詰所、

台湾・真明新營教会、会長

宅で青年勤めを計10年勤めた。

現在、青年会芦津分会副委員長、学生担当委員会委員、大阪教区青年会委員などを務める。

就任奉告祭 11月5日

東大屋分教会

四代会長

八木 香織 53歳



天理高校第二部卒業。

平成2年おさづけの理拝戴。

平成4年修養科第609期修了。

平成7年教人登録、教会長

資格検定合格。

会社員、介護福祉士、上級

・島原分教会女子青年とし

て勤めた後、結婚して東大

屋分教会へ。

就任奉告祭 10月15日

浪華浦分教会

五代会長

高馬 丈典 43歳



天理大学人間学部卒業。

平成10年おさづけの理拝戴。

平成14年天理大学伝道過程

修了。平成17年修養科第768

期修了。少年会本部研修課

に3年勤務した後、大教会、

上級・神島分教会で青年勤

め。

現在、少年会芦津団委員を

務める。

就任奉告祭 11月11日

## 布教キャラバン隊実施

9月末より12月にかけて、

大教会は布教キャラバン隊を実施する。全国8ブロックに

布教部員を中心とした在籍者

を派遣し、現地で布教実動に

励み、布教力と布教意欲の向

上を図る。参加対象は、教会

長夫妻、教会長後継者夫妻。

《日程、実施場所》

9月30日 鹿児島ブロック

南國分教会

10月1日 四国ブロック

徳島教務支庁

10月2日 福岡ブロック

門司分教会

10月24日、31日、11月12日

近畿ブロック

大教会

11月2日 長崎ブロック

島原分教会

11月16日 北海道ブロック

當別分教会

11月29日 和歌山ブロック

和歌山教務支庁

12月3日 奄美大島ブロック

大島分教会

教務部報

教養掛 (7月～8月)

主任

井筒 文夫

教養掛

梶川 和人・大西 直喜

吉田 充人

奥田 千晶・久米千壽子

教人登録

坂井 豊昭 (南 向)

立教186年7月28日

修養科第984期修了

奥 文也 (二 名)

奥 梨香 (二 名)

畠山 藍羅 (芦 玉)

立教186年8月27日

初席《7月》

《2名》和草、芦ノ郷

《1名》芦広、芦美屋

《順序運びより 6名》

教会長登殿参列《8月》

久米 義彦 (明 高)

久米千壽子 (渭 山)

西條 信治 (御 谷)

佐藤 敏幸 (有家)  
濱本 孝徳 (島原港)  
水田 秀秋 (末 宝)  
南方 洋一 (西 浜)  
望月 慶太 (門 司)  
松林 英也 (玉 成)  
谷上 行夫 (眞 一)  
岩切 正義 (四ツ山)  
中村 俊和 (芦 浪)  
以上12名

計 報

芦美屋分教会二代会長 芦ノ郷部属  
榎 克明氏 (えのきかつあき)

令和5年8月17日出直され  
た。享年67歳。

告別式は8月20日、榎康紀



・芦ノ郷分教会会長斎主のもと、  
名古屋市守山区の葬祭場で執  
り行われた。

氏は、昭和31年8月16日、  
父・榎紀世彦、母・為代の二  
男として大阪府大東市新町で  
生まれ、同49年おさづけの理  
拝戴、同53年修養科第44期修  
了。その後、前大教会長のお  
声がけにより、東西礼拝場ふ  
しん専属永原倉庫ひのきしん  
の御用を勤めた。同57年教会  
長資格検定合格、教人登録。

同年芦美屋分教会二代会長に  
就任。

教会長として41年間、上級  
・芦ノ郷分教会の3代会長か  
ら現6代会長までを支え、親  
一条、おば一条の信仰を貫き  
通された。

優しい人柄で常に周りを気  
配り、ようばく、信者を導き、  
多くの人に慕われた。

美三分教会四代会長 (吉野川部属)  
秀 義雄氏 (ひでよしお)



令和5年8月20日出直され  
た。享年81歳。

告別式は8月22日、宗我邦  
代・吉野川分教会前会長斎主  
のもと、徳島県三好市の葬祭  
場で執り行われた。

氏は、昭和17年10月31日、  
鹿児島県名瀬市で生まれ、同  
41年おさづけの理拝戴、同58  
年教人登録、平成3年美三分  
教会四代会長に就任。

上級・吉野川分教会では、  
剪定や庭木の手入れなどのひ  
のきしん、真実を込めてつと  
められた。

また、おほかで優しい人  
柄で、信者をはじめ多くの方  
から慕われた。

項 目	初	の	修	教
名 称 ( ) 内教会数	席	お	養	人
大 教 会 (1)	9	9	2	
大 教 会 (13)	1		1	
東 津 (23)		1	1	2
吉 野 川 (29)	2		1	
島 原 (16)	4	2	1	2
日 方 (15)	3			4
日 稗 島 (7)	3			
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)	3			
門 司 (6)		2		2
當 別 (6)				
大 島 (26)	15		1	
沖 縄 (3)	1			
尼 崎 (2)				
四 山 (5)				
大 冠 (2)				
島 下 (1)	1			
天 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)	1			
甲 邊 (1)		1		
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	1	2		
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)	1			
兵 庫 眞 洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)	3			
本 明 勇 (2)	2			
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	1	1		
神 滝 本 徳 (1)			1	
芦 明 彰 化 (2)	1			1
眞 明 彰 氣 (2)	1			
本 明 照 (1)				
芦 明 伯 (1)				
合 計 (209)	53	19	7	11

月 例 統 計 (自令和5年1月1日～至令和5年7月31日)